

学位論文審査の結果の要旨

1. 申請者氏名	井ノ崎 敦子
2. 審査委員	主査：（鳴門教育大学 教授） 葛西真記子 副主査：（鳴門教育大学 准教授） 小倉 正義 委員：（上越教育大学 教授） 五十嵐透子 委員：（兵庫教育大学 教授） 海野千畝子 委員：（鳴門教育大学 教授） 川上 綾子
3. 論文題目	学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方に関する研究
4. 審査結果の要旨	<p>学校教育実践学専攻学校教育臨床連合講座 井ノ崎 敦子から申請のあった学位論文について、兵庫教育大学学位規則第16条に基づき、下記のとおり審査を行った。</p> <p>論文審査日時:令和 2年 2月17日(月) 13時30分～15時00分 場 所:兵庫教育大学神戸ハーバーランドキャンパス 演習室4</p> <p>1. 学位論文の構成と概要</p> <p>第1章 本研究の背景と目的 本博士論文の目的は、学生相談における女子学生の恋愛相談への支援のあり方について検討することであった。まず、大学生の恋愛について自分自身の「アイデンティティのためのための恋愛」であると大野(2010)は指摘しているが、学生相談で恋愛相談をする学生の多くは未熟な自己を補強することを求める「自己のための恋愛」を示す。それについてKohutの提唱した自己心理学の立場から論じ、支援のあり方を考えた。</p> <p>第2章 女子学生の恋愛の特徴と学生相談における恋愛相談の実態 大学生を対象とした恋愛の発達と自己の発達との関連を検討する調査と、学生相談従事者を対象とした恋愛相談の実態を把握するための調査により、女子学生において恋愛の発達と自己の発達は関連があること、また、学生相談従事者の多くが恋愛相談に対応していることが明らかとなった。</p> <p>第3章 性的虐待被害経験による男性恐怖を抱く女性学生との面接過程 恋愛関係成立時の問題で悩む女子学生の事例を取り上げ、適切な応答性を有する養育者であっても、子どもが大きなストレスを体験した場合、応答性が不十分となり、子どもの自己の発達と恋愛の発達が阻害されて恋愛問題が生じることを見出した。</p> <p>第4章 「自己のための恋愛」を繰り返す女子学生との面接課程 恋愛関係成立時の悩みを抱える女子学生の事例を取り上げ、支配的な養育者によって適切な自己対象体験を得ることができず、自己の発達と恋愛の発達の阻害を示していたことが見出された。</p> <p>第5章 恋愛関係継続時の恋愛問題を抱える女子学生との面接課程 恋愛関係継続時の悩みを抱えた女子学生の事例を取り上げ、依存的な養育者によって適切な自己対象体験を得ることができず、自己の発達と恋愛の発達が阻害されていたことが見出された。</p>

第6章 本研究の総括と今後の課題

以上のことから本博士論文では、女子学生は恋愛の発達と自己の発達が連動しやすいこと、学生相談では、多くの恋愛相談に対応していること、そして、学生相談での恋愛相談を求める女子学生の中には、自己の発達が阻害されたことにより、自己のための恋愛にとどまる学生が存在すること、そうした学生には、カウンセラーが、共感的応答により支援をすることで、自己の発達と恋愛の発達が促進されることが明らかとなった。

2. 審査経過

(1) 独創性と発展性について

本博士論文は、これまでほとんど研究がなされたこなかった学生相談における恋愛相談について調査研究と事例研究を行ったものであった。実際に学生相談において恋愛相談がなされているのかについてその実態を把握し、海外の研究を含めた様々な先行研究の分析を行った。またそれらの結果から、実際には学生相談において恋愛相談がなされていることが明らかとなり、3つの事例からどのような支援のあり方が有効であるのかについて実践的に事例研究がなされた。それぞれの事例について「傷ついた自己」の状態である学生が「自己のための恋愛」を体験しており、その支援方法としてKohutの理論をもとにした共感的応答性が有効であることが示された。

今後、学生相談における恋愛相談のあり方がさらに議論されること、また学生相談だけにかぎらず、これまであまり専門家に相談されないだろうと思われていた恋愛相談が、他の主訴のもと相談されていること、そのことを支援することによって学生自身の自己の発達につながることも示され、さらに研究に発展が期待される。

(2) 学校教育の実践への貢献、社会への貢献について

本博士論文は大学生にとって恋愛相談が重要な問題であること、また他の相談内容の背後に恋愛問題があったり、あるいは、恋愛問題の背後の学生自身の自己の発達の課題があることなどを示すことができ、学生相談従事者にとって重要な示唆を与えるものとなった。恋愛関係は、対人関係の中でも公にみえにくい部分でもあり、このような側面を明らかにしたことによって、今後、大学生だけでなく、中高生の相談内容における恋愛相談の重要性についても示すことができ、学校教育の実践に大いに貢献すると思われる。

3. 審査結果

以上により、本審査委員会は井ノ崎敦子の提出した学位論文が博士(学校教育学)の学位を授与するにふさわしい内容であると判断し、全員一致で合格と判定した。